引　用　文　献

Skymetweather. 2019.〈https://www.skymetweather.com/content/weather-news-and-analysis/record-rainfall-in-avalanche-region-of-nilgiris-tamil-nadu-76-year-old-record-broken/〉（2019 年 8 月 9 日）

The Indian Express. 2019.〈https://indianexpress.com/article/cities/chennai/nilgiris-floods-heavy-downpour-kills-six-near-avalanche-5905118/〉（2019 年 8 月 14 日）

北タイ，山地の生活とグローバル化のダイナミクス

──少数民族アカとコーヒーとの出会いを経て──

奥　野　衣莉香 *

驚いた．北タイでのコーヒー栽培がこれほどまでに盛んになっているとは予想していなかった．それも，一般的な食堂などで売られているミルクコーヒーや，甘いブラックコーヒー（ウーリアン）などとは違う，本格的なコーヒーに出会う機会が多いのだ．

チェンマイ市内の街を歩けば，いたるところにカフェがあり，ほとんどの店が内装のデザインに凝っている．また，「北タイ産」「アラビカ 100%」をうたうカフェ，山地の少数民族が作ったコーヒー豆を使用していることを強調するカフェ，世界大会で上位成績をおさめたバリスタがいるというカフェ…商品に対しても各々がさまざまなこだわりをもっている．中でも私は，北タイのコーヒー栽培の多くが山地の少数民族によってなされているということに強い関心を抱いている．それは，現代に生きる彼らがグローバル化の波に大きく影響を受けていることの証左である．

本稿では，アカの人々との出会いで得た経験を中心に，そこにみたグローバル化の影響について述べることとする．

アカの人々との出会い

2019 年 8 月，私はチェンマイを中心に約 5ヵ月間の滞在を始めた．フィールドワークの最中はアカの人々と接する機会が多かった．きっかけは以下のとおりである．

チェンマイには市内を中心に観光客向けの大きな市場がいくつかあり，その中のひとつにアヌサーン市場がある．そこでは観光客向けの土産品を販売する店が所狭しと並んでい

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1）彼女の出身はビルマで，カンチャナブリやプーケット，バンコクを経て，チェンマイで自分の店をもつことを考えたという．チェンマイでは 19 年間，店を営業している．常設の比較的大きな店舗である．興味深いことに，商品にアカの手芸品はなく，ほとんどがモンの工芸品だという．

図 1　北タイ地図（●印は中心地）

る．常設の店舗と簡易的な仕切りを設けた小規模な店とがあり，簡易的な仕切りの店の方が多い．店で土産品を販売している人には，少数民族やタイ国外を出身とする人も数多くみられる．ある日，店を回って話を聞いていると，タイミングの良いことに，少数民族のイベントが翌日にあることをアカ出身の女性オーナー店員（65 歳）[1] が教えてくれた．

そのイベントはラジオ局の主催で，ホテルの会場の奥まった一角で開催されていた．中では 9 つの少数民族（モン，リス，アカ，カレン，ダラアン，ミエン，ラフ，ティン，タイヤイ）が，ポスターや伝統衣装，道具を展示したり，グッズの販売をしたりしていた．

アカのブースでは，伝統行事である「ブランコ祭り（*Yae Su A-Phaew*）」がポスターで紹介されていた．私は妙にそれが気になって，ブースにいるアカの人々にいろいろと尋ねた．そしてとんとん拍子で，ドイ・メーサロンで開催されるブランコ祭りに参加する計画が整った．ブースにいたアカの男性の娘（満 22 歳）がチェンライの村にいるということで，ホームステイさせてもらえることになったのだ．ドイ・メーサロンまでは，その家から車で 40 分ほどである．

そのイベントでは，30 代前半のアカの女性とも出会った．彼女は現在チェンマイで一人暮らしをしている．発音も含め英語が非常に流暢だ．その訳を尋ねると，シンガポールに 1 年半住んでいた時に自然と身につけたのだという．それからも英語力をキープできているのは，シンガポール時代の友人と今でも連絡を取り合っていること，更にはチェンライにあるアカの村の家で観光客向けのゲストハウスを営業しており，そこの客に欧米人が多いから，ということだった．彼女はそのゲストハウスに客の予約が入った時だけチェンライに戻る．それから続けて言うには，「村ではコーヒー栽培も盛んなの．私もコーヒー栽培をしているから，宿泊客にはアカの伝統的な料理を楽しんでもらうことに加えて，コーヒーの販売もしているのよ．私は一切飲まないけれど．」

写真 1　チェンライのコーヒー農園

北タイの麻薬撲滅運動と商品作物コーヒー

北タイのコーヒー栽培は，故プーミポン前国王（ラーマ 9 世王）がロイヤルプロジェクトの一環としてもたらしたものとされる．その背景には山地で盛んに行なわれていたケシ栽培があり，栽培者の多くが山地の少数民族であった．彼らにとって，ケシ栽培は重要な現金収入を得る術となっていたのである．

この状況に対し，1969 年，タイ国内では政策としてロイヤルプロジェクトが導入され，1970 年代初頭には国際連合による麻薬撲滅キャンペーンが実施された．こうして北タイの山地ではケシに替わってコーヒーやイチゴ，アボカド等の土地に合ったさまざまな商品作物の栽培が開始されたのである［Renard 2019］．だが，当時を知る人々に聞いてみると，当時はコーヒーを収穫してもその後の販路が確立されておらず，安値で買われることが多かったという．そのためコーヒー栽培を途中でやめてしまう者もいた．

しかし，2000 年前後から，タイ国内におけるコーヒーの消費量は上がり［Bangkok Post 2019］，北タイ山地におけるコーヒー栽培も盛んになっていった．

しかしこれら商品作物としてのコーヒーは，どうも，山での生活で培われた生産者の飲料文化に大きく入り込んでいる様子はなさそうだ．とはいえ健康ブームも相まって，タイ平地で北タイ産のアラビカ種コーヒーとともに苦いコーヒーが徐々に受け入れられているように，今後変化していく可能性はあるだろう．

現代に開かれる伝統文化―伝統の祭り，インスタ映え，信仰，そしてコーヒー

さて，ここで話をドイ・メーサロンに戻すことにする．私はブランコ祭りに参加するため，上記ホテルでのイベントで出会ったアカの男性の娘 N とともに，2 泊 3 日，寝食を共にした．

2019 年のドイ・メーサロンでのブランコ祭りは 9 月 7 日，8 日の開催だった．その開催日は毎年異なる．大体 8 月末から 9 月初旬というのは決まっているが，あとは開催村ごとに日付をずらすため，直前になるまで村長同士で話し合われる．日付をずらすのは，ブランコ祭りがアカの若い男女の出会う場として重要な意味合いをもち，若い男女は，こちらの村からあちらの村へとブランコ祭りを渡り歩くからである．

ブランコ祭り会場のドイ・メーサロンの標高は，1,000 メートルを超える．見渡す限りの山々と緑．私は，胸いっぱいに新鮮な空気を吸い込んだ．人々はアカの衣装を着て祭りを楽しんでいる．だが，祭りで私が最も驚いたことは，8 歳くらいと思われる小さな子どもから大人まで，本格的なカメラを手に写真を撮っていたことである．ここは伝統的な祭り…だが見方を変えると，撮影会の会場のようだった．「あなたはインスタグラムをしている？」会場では何度もこの質問を受けた．なるほど．タイの山地民社会においても，いかに SNS の威力，また，視覚に訴えかける「写真」の影響力が大きいのかを感じさせられた．同時に彼らの現金経済的豊かさも垣間見た気がする．[2)]

翌日日曜日の朝，私はNとNの従妹や友人とともにアカバプティスト（以下ABC）の教会にいた．皆，クリスチャンだ．とはいえ，Nの家では十二支の動物が描かれたアカのカレンダーも飾られているなど，アカの信仰も保持しているようだった．教会内を散歩していると突然，「ほらみて，コーヒーの木よ！」と，教会の一角で育てられているまだ小さなコーヒーの木を指さし見せてくれた．

Nのアルバイト先はアカのコーヒーショップだ．そこの店員はABCのメンバーだという．後日訪ねてみると，その店はチェンライ市内から車で15分ほどの場所にあった．メニューや内装から，店のコンセプトが「アカ」なのは明らかだ．店は見晴らしの良い高台にあり，周囲には見渡す限りの緑が広がっている．また，更に少し視線を上げると，チェンライの街をも一望できる．カフェの敷地には，大きなハンモックが一面にぶら下がっているオープンエリアがあった．そこでならより一層，自然の中で宙ぶらりんになった気分を存分に味わえる．そしてここでもまた，まるでお決まりのようにカメラを構えた客はしっかりといた．

「コーヒーは飲むの？」

「飲まない．」

その後，滞在から3ヵ月経つ今まで，山地で生活を営む人々に出会うと私はいつもこの質問をしたが，ほとんどの人が飲まないと答える．Nも飲まない．味覚に合わないという．

自分たちではあまり消費しない「コーヒー」は，現金収入を運んでくる．一方で彼らの自給自足の生活や伝統，風習の形は，確実に現代社会のグローバル化と消費社会の影響を受け，変化している．それでもなお，自らの伝統を何らかの形で現代に合わせ保持する動きは力強くみられる（写真3）．

写真2　アカの伝統はお茶

写真3　アカのイベント，チェンライの少数民族学校にて
後世へ伝統文化を伝えることが狙い．

自文化の保持，発展は決して閉ざされた空間でのみ果たされるものではない．世界の文化がダイナミックに接触し合う現代，生産者―消費者の構図をはじめ，彼らのネットワークは確実に拡がっている．また各民族が互いに影響し合い，手工芸品の形態が変化する様

2）山地で商品作物を栽培する者の間でも，経済的豊かさを得た者とそうでない者の格差が生まれているという．

子もみられる．こうして多くの人が広いネットワークで互いに関わり合い生きていくことは，異文化との接触機会といえる．そしてそれは，互いの文化や考え方に影響を与える機会である．そこで新たな文化や考え方を取り込み，培ってきた文化にそれらを反映させることができれば，それは文化の発展ともなるのだ．だがそのためには，自分たちの足で自律的にしっかりと前進するための環境が必然である．その環境は，皆で作り上げるものであることを，我々は忘れてはならない．

引 用 文 献

Bangkok Post. 2019.〈https://www.bangkokpost.com/thailand/special-reports/1631922/wake-up-and-sell-the-coffee〉（2019 年 2 月 20 日）

Renard, R. 2019.〈https://www.unodc.org/documents/alternative-development/Final_Published_version_Mainstreaming_AD.pdf〉（2019 年 8 月 19 日）

同じ釜の飯を食う

高村（井上）満衣 *

滞在先の女性教師サラ

「この村の子どもは素行が悪い．うちの子どもたちには外で遊んでほしくない．」そう私に語ったのは，この村の小学校で働いている女性教師サラ [1] である．私は 2016 年からタンザニア西部キゴマ州のある村で，現地の小学生を対象に調査を行なってきた．調査をはじめた当初，私はこの村に住むサラの家に滞在させてもらっていた．サラには，4 人の子どもがいる．1 人はすでに高校に上がり寮生活をしているため，同居しているのはキゴマ州出身の夫，義理の母，そして 3 人の子どもである．彼女は 500 km ほど離れた北部のシニャンガ州出身で，教師として赴任するまでこの村どころかキゴマ州に来たこともなく，親戚もいない．タンザニアの教師が公立学校で働く場合，政府が学校を指定する．そのため，サラのように縁もゆかりもない地に行くことがしばしばある．

私がタンザニアの他の地域の人に「キゴマに行く」というと，よく「ムチャウィ（*mchauwi*）に気をつけろ」と注意された．ムチャウィとは邪術師のことで，キゴマに多いといわれている．調査村の人たち自身にも，私の調査している小学校に，夜になるとムチャウィたちが集まるので，絶対に行って

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1）以下，出てくる教師の名前はすべて仮名である．